醒睡笑 上

和書門 類
二六七一九 號
七〇 函
七 架
三 冊

内閣文庫		
番號	和	26719
冊數	3（1）	
函號	204	133

和學講談所

国立公文書館
National Archives of Japan

醒睡笑之序

こゝに元和九癸亥乃年。天下泰平人民豊楽の折から。某小僧乃時より耳にふれておもしろくおかしかりつる事を。反故の端にかきとめをきたり。今年七十にあまりて。柴乃扉にて明暮。心をやすむるひまひまに。ごうるさきはなしせし筆の跡をみれば。されどもとれつゝ睡をさましてよろこぶ。さはまくりつ

浅草文庫

醒睡笑と名付かくといひつるこさお
と。八巻となして残そのま

醒睡笑巻之一目録

名付親方
貴人行跡
[illegible]
吝太郎
賢達ある事

醒睡笑巻之一　　名津希親方

▲いろはをもしらぬこざかしき俗(ぞく)。何所か東堂(とうだう)乃座下(ざか)よりいり。我く身もなかりむかけ。為名をそてらんをもいうくふしゆ。何とぞ。左衛門(さゑもん)か右衛門(うゑもん)と名をつけてくれさふらへよし望(のぞみ)ければ。東堂大うゝこそちられつゝさひとつ。たもひよりくれといふてこさうせよとて何まゝばう〳〵。日本左衛門(ろうがんさゑもん)

はこなよしやまり。東堂にて
らつく。さやうの大なる者ハ。かつてし
るで。愚僧までハ。人のやうへんをしんぜず。
さい。つおとこにまで。ぐずんれおとこに。い
や。にまり大なる者とハなられ。どう
愚つと仰さるさへ御座りハ
▲うるのごく人それをそとやともちまし。が。
いろはよりわつまへの。がごさの文とさへ
なひ事なし。おる時地下人気りく。

我名とりへさきよしきそれぐつまいの
いろはとかくりしにとさい気ととつ
きうりやいや。それなりくくずろ気とや
はやんいやは気に気ぼは気とに
られどもいやうずとてこうしなぐう
て手たるをつさうへ御座にかると
〆へれバ。ぜう。へとちれ愚つとつらう
ぞとハつり。
▲んうきうる仕のひらりんまで。文十

なまることわりなと孫や十郎とぞ
きなる。有時(ありとき)ある人が、の孫十郎とよぶ
出(だ)しぞちへ年(とし)よりも。なまりたる名が
よりひめどた。なふりては右馬丞(うまのぜう)よ呼れ
せと。なりしときおこをぬらへとひく
と。わひられど。さやつとる要とつき
られぞ。いさこそとや。いきいたよ
▲佐渡(さど)よ本完房(ほんくわんぼう)とりふ山伏(やまぶし)なり治部卿(ぢぶきやう)
とて弟子(でし)と持(もち)しがあるとし名代(みやうだい)と

号(ごう)し学(がく)入(いり)させけり。道(だう)とり師名を抗(まどう)の
修行(しゆぎやう)す院(ゐん)て本国(ほんごく)よりうね。師は本覚(かく)。
たいめんのとき。治アマけるやう。二度(えど)よ
き。先達(せんだち)懺悔(さんげ)をかへられ名とるへ大事よ
かされてゆとかうりけまいばなにと久
まうつし桃(せ)すりしまれさへさやうよ。
大なれ名と。ぜにはねよ中(あつ)くの事なり。
けりかつし本山(ざん)ふくつさうる名残。
よんねを又いくぐなるでう。ぐて中(わく)なり

されこそなをしける

▲禅門よろづある名をばむつかし名とハたゞ凡
といふ人ありて、ことゞとつぐぞこゝ
ろなく二階とよむところへ、よみかしこ
まりてゆる親しげるといふをきけハそ
のまゝひじきは。御かいをよく尋てれ
座行るなどよ。やく言へ仕まひとい
ひしは。それ後行る人ぞちがえ八畳ハこ
ちでかうかぞ。きんハとくへと。りんを

ひじき

▲小姓乃名をつけかねてつきそひたる人の方
にたのみけれハ、よしとて、かしこまりひゝきれ
ぐ。ぎ、それ時ハ世がまへに居られるがら
あなりとも。用の行るときさむらひぞ
そといふ名あるへし。

▲傾城よ 貴人之行跡
近きころ公方は御誅伐乃時召され
生るありて上京放火なされし

うつりしは遷延享の前よりして今
浄瑠中のさゝぎ。上下からだまされる
事。前代未曾有とやいはれん。さ行ね
ずるがしくそれにたちるゝやうをいとに
わまでぐ。上京より火の手と見て二条まで
ひし事も有。妻のまつ我子とさへつまでのせ
べきをひとも思ひ。ゑつ住つかなる子とせかう
まかひ。くつるもかるゝめき。四条の橋れを
とまりぐふけきゝうり。ゆまりうら出し。

たとへ子をおろして中をまんとしかとひ。
池のうへまでうとたひて見れバ。石ふす
すそびひかる
▲大名乃世まもぐまで捌たる大髭を
抑一体あり。このまりふひぎをまんし。
今時のされよ。世の人ぐ口が髭頒とハ。なりふ
というぞとらひまふ。世上ま若様の御髭
どがるるれども。にがしるれとかさね
されハ、此度あひと申すべく御ぱ大名うち

なまぜなひげは誰とさいふとひげ
となぞくしてかこなるもこえふと
まねかせなひげなちかくらせ。さてやるて
弟づりしひきととへ弓矢八幡日本
それしや

▲大名のもとへ客ありり振舞に湯漬出さ
るゝを席へまいる客あり。それなるを膳次
第へ廻り。又家来あり。膳を出せて福と
どくとれかまゝかみる時、相まかるすへかると
らび出しぼうにとて血をいれるやうと
うきや湯をえもらさぬかと申ゝく
時分をつかゆく湯を出席るかはけが
はきすひと中ふうけまへぐどりとも
ひよたりまする

旅

▲腑かぬけたる仁よ。遊びとするまひける
が、脇気ぞ又そこぞこれは、ひまのれつまきるま茶
まそかりるとれりとふせ潟　帝之久

がわそれど。はませりてわりよする
よりふとぐでんしおくり。ある時仍のるま
まゐりける先へ二尺半柄の朱鞘二十本
ぞろりとさしたる中間どもれ"しゐと
見ずどうつくしそてと世ハひろし。与ねる
なるまや。癒ざるがふちとそなすさき。
んずるやとえひきハぽをするよにて
の鑓のえれいろハ火をさひてむいるとも
れじやくろ竹まゆしなりぞひまへぐのよわつ

たまやといひつき
▲藤又右とそはござりきこゑとはきをえれ
とそうつきとしうとよ。左京ちゃかり
にあしやどまり二人つまとうら。謙堂ちん
風呂よいりんとも。藤又ハ祖あまえれ
ぐうつけとかりしく見はき。華まんず事之。
小風呂よく、行こまとうんとうくこ。
かまのへて出る十市。京のなしひよ。風呂よ
入とれハ必わさまとえるそ。腋とふる

といふ人とりふらしまでもうしゆるが
旅人(ここ)ぞといひちらし。へ小風呂などとうひ
へ入りみさ十月とるかのるをとらりえし。
当るなれば、ふぢやくりせたいとさるこする
かくしてそゞ一つんかりてくりぞ。萬太郎
みくりせるといとゞちるなれ共りふ也り。我(われ)
んかりりしまでかつんは稚気(ちかい)にすしと
あんじ。ぢ人(ぢん)力よわくしと、へともれを
まちくおづくをつとりたらまいんぐ。

かれわびて太は膝をさ(そ)へばいばくのうけ
わぞ是非(ぜひ)なりくんさんとすめく時。当るなれ
いふ也り。萬太郎いうひいなくこれが
行るは。禍(きよ)んこれじや
風呂(ふろ)さこきの我身(わが)はもうになりそく
入れ垢(わろ)は出るこれの郎
▲旅(たび)人湯(せよ)をうつむ時がまへて人の目まへ
蛇(じや)よ恐れて男がいる時事議(ぐりせよ)よされよと
りふを内の若衆(きくの)ぞうと湯をかり

てとりゆへ蛇をいきてちゞまり。件の
亭主はのちまかりてこれく蛇わりやまひを
まじやかんとまれさりと兼而もだれ
まつるこそ守りすれ
▲男子一人あり。親のとつひとて。所子を
請しぢやうする時に。所子いふ親のへに。
らぶまなりけるに作そふりんやまして人
とぢうばとて池でかり。鯛をうつさん
まなあり。毎日会て投ばかれひ事

久し朋友よりわふさびよけまませよかし
ともくむまどもをうくゆるさびぐて
しがる人をとうつきと見れし。何の時
ぞうてやかととりけはするさへかりし
こさにぢよむりひよつけをとちふて見
よとりよにうけとり一口もちふくばら
うし歌もや人よぢゃかくなひとりかくて
▲十人計つまぶらそて小判へ身かうり
参詣しけり。其日らん参ありれぱて

おされつゝ下向(げかう)するたもとじや。夜(よ)をかのうる
わけねど友達(ともたち)の中よ。一人勝(かち)のまけりと
これく。勝差(かちざし)乃さやぐらうよ。刀(かたな)かどをへ
てさしうちこゝハ何(なに)はとやるぞといふよ。
肝(きも)どつぶし。ざやをねき。ふりそこなう。うく
いくえんつきれともあし。おけくり
いふすハ。ぐさきられぞこそ。さやをとり
きね。
▲かきうたのわけしが。へよむうかく。

我(われ)ハ日本一乃るすをぐらくこたいくこと
いふ。何事をとうとふ。されバようをよ
て。来(こゆ)をつくとどるに。勿論(もちろん)さるへさぐ
かさねハ。例くよふるが。えわかるこそねが。
いるとつるすり。不孫(きうせん)入へまもらうとぞとらひ
さゆよつり。来を入くつらハ。あともこもに
来たろこ。杵(きね)のわけさきをぞ。つよまるまひ
と。乏家(ぼん)しうとい。ひをくそねよ。拇(さそ)
はりさげうるうとに。米丸入ゆうハと。

とんだ異見は其了簡はとんださよ
▲石刻は板行といひ傳はり。板行の名人
喜和り家のたとへれ等様する出合く
座敷へ請じ。主人ハ作りよ山とまて介
しゆきよわひえいり梅なりぞ。少し
障子をわけ。ミづから靴とふいはく
君様よく。我ハ蜀ちのうぞと
▲七月風流と他郷よりくる。太夫のなりと
いふ地下のもしらうるれハかりしくよ

楽りなくしくも。狂言とするとれぞ。つ
きうる土民は烏帽子風流は入るものぞ
そらにまるをといひつゝ。郎波でいよ
とさねがして一毎日も色風流とうく向。
こらくわらく。名所ハ行るかとぞうよ。
中くわるとこそ。唯ぞ狂言よ留か附。
名所しとよひされん。太夫茶屋のなど
君よ行るとみそつりハ
何と時の答よ行くぬとん。太く...

がち居のならひとう

春志郎

▲ともれてきつきさ。さ悔くゑらる家

行り何とうやとおりひて生て来る風情

今まハ仏斗やなとくいふ処へとうふく

とうりよ来れり。本道とうふとう

そんさうかうし小豆のとう悔か。いやい

はもの大豆乃てとりいふ。それすうえ

うふまひがつうし悔行るまひ雑かと。

本ミの口上作意うつるゆうふしくとうく

きこゝしろし。人性欲平嗜欲害之と淮

南子りも書けり

▲家来ばらは本をも出て飯はわすれども。麦

飯しやかとにいやでわるぬどといふ。我ハ

生得麦飯がすきしや。麦飯なくバ三里

もゆてくふといふ。ぶしんとてふる

まひなり。又あ時節の人来るぞらへ麦

飯かもとさじや雑なり。米のめしハ何とも

どうも出さねといふよ。いや米(こめ)の會(くわい)から
ずぬ筆(ふで)もゆるふして文(ふみ)かへし
▲行(ゆ)る藝者(げいしや)の親子(おやこ)つまぶかで客人(きやくじん)への
茶(ちや)よ行しかぞまぞ十四文流(ながし)なるあ。
大名(だいみやう)にて御座(ござ)ある日りはわりしせさ
さしの見つきをとりてえんびくとされ
おたれん親(おや)がいひまるもうはさやうに
おこしのまれおとぞむさとわねをの
うづ大名へひよくしとぞざるくるりが

行るものじやり
▲是(これ)は増上(ぞうまい)あるひありとつねりいふ
お行り。増(ぞん)ぞう増(ぞう)なうるへきる。ち
と尸さんどれとかきうひなりまし。
是非(ぜひ)おしと何まへ何とこのそうもよ。
胡椒(こせう)はいうねかぴやいうねぞまなりれ。
ちとそうふ。
賢蓮(けんれん)ぞう
▲ねりるねうかしる男(をとこ)大名れまへ参る。

何とぞ久しくみてまゐらせそ。手をついて。
此一両月は。癲癇気にて取まぎれ。ぶ案内仕りと
申上し。友達と座を立ていかに。そちは咳
気とこそいつもいひつるに。今のまくさ
ぞいて。病の名をいひつる事よ。
いやいやさいは物によ様を知らうとこそ
りつぱてんかんといひてそ。

▲古今三流中興行の折節言ける棚あり
あるとき。青磁の香爐たをしきわり。

立よりうるけるうりはぱしかうろんい
ふることとがれけまいば。肉よりなくと
おねても。銭二枚と

▲或る僧。小者と二人つれて。銭湯に行
夢ときふるとりぞて。其中ふづきあり。
小風呂に入ぬ。つ脇に折つりも。利口を又
がふくさた。小者を見ねふりし。二者
風呂めに。其中をとりたりてそといひ
それば。さいがねていにおる海をさし

をもやとらまいぞといひけると

▲花見の興に出家さも。若衆それ附よなりぬ。堂のほとりより人のたちくるをかくるされぞ。何とまぎさけ。手を何花て礼をする。つまの者わきまへ。石塔ありといへ。彼人は当世は。何れてい乃へりも礼をしけるがよいと。

▲かへされとするて手のさいくる銭若殿ばらして。相撲をすく器わり。又手てまと

源太ぽどこしをすくて。ぷでちりうかん何るとうそでまして。相撲をこのむ坊主わり。双方名あわひ。俗と俗とりくさひとくれども。かのつらさにより。手抑ゆくにふそだ。坊主うちと勝れぬ。俗勝をもち。かん仏のおかけ時まけくのこさまに。さうくと夢をわけ。ひかやど乃坊主ともも。をまひをとりくるが。おれ入たほど。ぞしくさいやつよ。おふた

するかなひと。悪口(わくこう)をうりはぢらした
しさよ。

▲ちいさうつもとろさて。わりくをの。
わやまちはおりしとけやぶり。これから
血(ち)なるくをとみえて。疾(せつ)しやいふとりふ
をのおまいばいやくるしうしんだ。むりしよ
をぢいとはねるちとある程り。さて
おひさくやとべくかわられど。まさも
かめらまんば。やもときこるりやとうてと。

足(あし)をやぶり。血(ち)をあかれ。何としてと
人のとふときゞ。いや足ハ大事なし。若(もし)
をいろはにほへとしおるやとあり

醒睡笑巻之二目録

謂被謂物之由来

落書

ふはとのる

鈍副子

無智之僧

祝過るもいな物

醒睡笑巻之二

謂被謂物之由来

▲いつまでもおなじうするをつねまうくとハ。風呂といひ。そそわぎの声なる故。柘榴風呂とはなんぞといふや。かゞみ。いるとのこゝろなり。

▲嘘八百とは何といふぞ。聟が舅のもとへゆきけりんざんまで一礼おわりて後。しうとありしよ。今またくハ空むきあり

しほは。塩とつかひて何ぞんれいど。と
ふして胼どつかし。京へ俄に塩とうんふ
りのわたる。高砂は塩とかくとよふ。
利口する者は合石亀の子といきほひ
学けりとて。八百よろうきし。聟坊
ひ。座敷へもちて出。塩とおしよりは
をるとて。かね七せうり。それより塩八
百といふさとかりしや。
▲いろがたりとりふすへ。さとれじとよ。

なるべきさへ筆色なり。宗色のちかある
武士のやくそれはなりもうくしとても
いろがはたりれ瀬田乃色をし
▲物を秘用といふ詞のかりよ。ように
とよいかへ
わら塩と戸さしもよふやするがある
清見か関を三保また松ぐら
しまあそんびのあへし。三保乃松いつの
面白景を詠かば。関もとよかれえゆく

まひわどりに。清見が関をよしにせよと
よめり

▲なべて上臈(じやうらふ)がるをいはゞ。さてちごとしといふを。
禁中(きんちう)にては。まちかげにしてとかや。さてそのつひ
おいへり。こねりといふ。言葉(ことば)乃えんにや

▲ぢんべいは。風の子とおもふもしれず。世り
いふは何ゆへぞ。犬梅(みつ)のあひこの子なるを
いへり。

▲猩(しやう)とは狒(ひ)によく似。狒とよぶ猩によく似。獣(けもの)と

何ゆゑ異(けう)とさまし。むさと物毎(ごと)にさ
悔りまめくなどゝ。なべて世の人。何ごとに
いひどろかことよといふす。そゞろしきや
とのえんにあり
去毎(ゑるさわ)代風にちるこゝぞふかひどうは
ちるしかれども。そやうつさなり

▲京にて家物(のりもの)とりき。おはひは庭(には)にてそく
ふしくたとこ城。六尺(しやく)とはあとよばるゝん。
さうなりけり。屋敷(中ぎき)につきをつき。て

よ付。一切物差横尺をもちゆるよ。田舎乃ハ。
一尋を六尺よとるはかりハ。都のハ。間尺を六
尺三寸よとつく。一尋とするはかりなりされ
ば京師をハ。都ハ六尺三寸乃尋なりとり。
つかさどる男をバ。田舎六尺乃尋なりと称。
其外ハ。主人なる人かれとも。下男かれとも
乃びとゞもとちゞひて。まぶ一向なね
ゆへよ。かれ下人を六尺といふとなる。
落書

▲田中の真実とうや六丈。ちいささ前後
乃茶入を不おしまりて秘蔵して。
ぶじしられぐあ

▲二服さへいらね茶入なる名物なれとも
わろくこちすのかよさしく邪
揚清浄る掬の城ぼうりし。和田とふ
竹も公卿若世よ趣あ[illegible]かわり。
信ものこさしくハやうるゝ京小袖
つるとくさしてくらられざりゝ

▲山門より。三井寺をやぶり。撞鐘を叡山へとりし時

三井寺の児きくしろまなりあん
つくへきりう子ちと山へとうまゐりく

▲越中の大守神保殿ハ落浪去殿なれ
智耳をそわりし。是れ登れ越とよまの勢
ていろつ根性さうらふなりけれバ
神保の家ハ中あまとろまど売らじ
このうちぐされくう無名の躰

▲甲斐の国武田信虎公れ息女にと。菊亭
殿へ契約ありしが。いまだ聟入をなさざ
りけるに。信虎公。菊亭殿へかくしける時
むこいりにまゐらるをねさぶれきうと入
こうしていふりと宮こし入た

▲請行世帯を世に渡請けと云ける。う
とくのきさり
世帯とハいのまる人書請行ぶや
うしきをゆつりし内よえうじをけ

▲京北の嵐山に。桜木のあくてありける
ひていくらともなくわり。それと称匠名
の中より。ある人ひくよどるなりく御座
しろよ

肌ふけハそきつころもびつ桜匠の

秋よりやまとにひとりいらん

▲将軍様は京に石田治部少輔めかり
佐ゝ宗か京伴まうけおきを捕へとなり。らくべ
とらへしけし時

雄長老

大ぐされ坪のえらりやう度とげまて

ちやまくもひるあぶせんせうりう、

▲慶長十九年乃冬。将軍様大坂の陣へ出陣
よせらるゝ時。日本六十余州乃軍勢
一騎ものこらび。出陣ある。本陣ハ天王寺
乃茶臼山にて何りしと何ものりん
大将ハ家もとうちおちやらす山

ろまハされねもおくぬうがき

ぬいとの哉

▲仁柄らしき男材乃おほよ鍛と入るか
ひさいをくとうけると。行る家のわし
らむ壁てぎしうしへ室をさ目あり。まづ
ちと火にを行くり。茶ととのこてみと
とりわきらくと一目うしらり。覚へて
けりぬ。いまし人へさを何うしは身なり
しら。思案を世にかちふまでぞ何ま
さこさしおのまやと。瀉をこがしはぬ
といひけれバ。あづりよ火にわくり。茶おと

乃こそ人ちさ肉よ。犬する鍛を丐うか
おにさし出さうとこは何としまるまを
あのふと云ぞんしやくしくれど。やるふ
いんさとぞんそれ亂乃日なりと
▲襟まで耳わりといふすと。まもれ。ぞん
でうろまハ。中く人でハおいりといひあ
しろうらしろとされくぞ仁ぬらう。
肝をきりて。そでいさかしけじやや
いふぞしらる人へおもしろをすててよろこ

びぞのまく。かうされ京とむきびやう
▲なんこうゑんそとおがしきが宿をかり。亭
よこやまのあるじとかうすりつくりたり。亭
われそいかさ雨ぞの人とたちどもしはやぞ。
ともや屋ちこす人ぞ夜着をかりてせん
やとりゆいややうやどの聖仙山偉り
せうくさむきるすちば、なくれ。き頭と
りつくこのまし。いぬるが夜ふくるま
まうこびひ。言ふこさしれさし。時よ亭まく

是乃孫ぞここよはぐわしとかりかせくかと
とよいやさゆうのるすはるもとこふ。
それすんば。むしろを二枚させられよ。
鼠がきうこれとねまへ。さびらねずよ。
▲ある人まうきれ席よ句を出し。たうく
之陽じる部をとりつけ。まうるいき
て林くとりよて膝をつきされは。かま
まろつきに社壇がゆくにとりき
れるすよ。

鈍副子

▲小姓とかきて。いろに似て薬をひさする。
るすの外行し。是いとおもひよる時ら
と座をおもひぞれをまつわりびさで
ほご座るとぞ。さそくさとのまいれ日なり。
まうふりけとも行るまひぶつきやと
わまへ。みまろと手をつきぞ。いや日なかも
ひろよ。ク座る殊よ。ほ為行しん。まうさ
もほざらふと

▲痢瘂で後よりびるすのかるまひ行り。
さうろりれかえん。並びのみ。病れつてさ
るとどりわげ。病れ舞ともなどなし
ろやされどさふりよまひ杖しと。一腕ね
けるかうき立て。床まふそうる矢をとろう
ねにをちやまひとさやなどらやさ
まきもろ矢と一つよりさへ。二つのやれ祢
とつさ合。狂のりきとたえなし。かうや
まひてとやなど舞あるへし

▲石引須山よそろうすぞとよ。常にようう
合わる志ゟ一人入たしぼ名を慧君と流
く。交達よ鈍なる男ありて。つねに慧
君と云名をもちれ。か禅つくしようぶ。
禅門腹立し。志きんへとりよ茶わり。君ゟ
まいるすハなきさうい。やまるえねど。さて
んぞえきんとそつまきぞちわる人れお前栽
へり。志きんとしやうと花さあそ怔り
志とこれき志きん。こまハ志やうといふ

とちゝへバ志きんのむれなをとくおぼや
ゆきばこがなと同しことぞこもゝ
まゝ為といひかくかそ。名りね。禅志男
飲掌しけるが。又二三日ありて后より
わひし時。志きんハうちこもれ。さふくも
志やうかなハ久しいとりける。
▲桁て登するもわりが。殿様がこもりう
樣がくこさ海と。何事をかをつる。高人
叫まよむひひむさとかの字をぞはけなひ。

聞かしとおり。其後膳をもちて腕をき
汁の髭に飯粒がつく。右の男居れの
とりはらいつかへとさとゝる
▲人のいひたる虎は千里ゆけども千里ゆき
ねなどかへりけるにきゝなれけり。虎と
いふ字を。奴の内にそてをれしてゝ
んねとかゆる。後大きに虎といふ字
を書てまし其をひろげ見せけるが。
右の紙をちんはうぶくのふたうかし

く出り。行る偏屈にてありけれど。もいしし
たり。其大八一念をもんもうに行てあれよ
▲越中に井見の庄の吾殿といふ大名あり。
世にすぐれたるうつけなりしが。母御前常
に笑止と歎のひしが。ある時乃兄来り。
笑止やそなたは。ちゝれをの何かなり。何
事をいひてさましいひて。たすき他に
ときくちかと折言をもねなど。折檻を
行ばさぞまでそ。さましきやうとと。

教訓は万民のうとうけじひ是非とく
とよ一ねんをおくとくやうまれし
嵯峨の八朔の礼とて。諸侍が仕わる。家老
の人々中にも。五日の御祝儀千秋万歳ことに
て天気よくて。とりのふるまひの大名が
おとの祝儀で事をようし。れぞいひさ
さまうにいいそせまひろ
▲道場にて。浄土宗の寺へ。尼になりれ
一人の弟子とよび出し。十念をとうけさき

よし。披露して、さびしひとわりしゐばひは
さるとて。方丈より下京まで。たかにといふ
の女人の寺りはゆとし。中にも何ほね老
んをいひし。上臈とく。女房とよそ尸べれ。
によみんといふすやわるとぷ犬まゐり
まゝれぐ弟子の恩答まてたりくさ我まれ。
何ぞ殺をそへて善男子善女人と
いふとりのて、かめしくそいまさちういえね
とい一事成稀するとなとさんぐよ

かくれゐて。かたそへおくる時。紅赤面(こうせきめん)し
て。ぜうしや。御機嫌(きげん)のわろきをとする。
下向(げかう)きんやと申されしまば。才子いふ。いや
くるしうもなし。ちと女房どもいそぎ入て
は庭(さ)わるといふさ

▲小僧(こぞう)あり。小夜(さよ)ふけて長押(ながざか)をとる。庭(にハ)を
わすそこたうとふうりゐたる。坊主(ばうず)是(これ)を見て人は
け。それハ何をするぞとやう。荒(そう)れりが
り。さみぐるをとさんともれとも蔭(かち)ぬ

とりへでさそく絶(ぜうん)するなつや。それ経さくか
すまてなる拍のそこうしハ拷がどくくま
い。座わへわがまゝといわるとたでらへさ
もとへ。師道(ぶうせい)の持病(しびやう)ぞうく
星(わ)ひとつみえける夜(よ)のぞれしきさハ
月をまちける。名月(さゞれ)宿れぞなし

▲まうき男(をとこ)の聟入(むこいり)ありといふよ。知音(ちいん)ちや
異見(いけん)し。かまへて時宜(ぢぎ)とぞいへ。心得(こころえ)ぬよし
まそ行儀(ぎやうぎ)しが。一度(いちど)の膳(ぜん)のそのうしく。つまりかい

あくびだに海よ手をすりしつゝさば中ゆう
極こなりしので〃座るかどれりしまゐりた
候ぞ

▲京ぎて口きゝしかき男だと出家を分
がり一名よはめておそびさやしむひつゝ
さりきんへよむりひとふやもこさ事なり
をうへんがんちゆうよおふさ時おそう
いづくとりふへしさるとめそ仙よ海りせ
てといそんぞる。それ時風りぎとんば

いうんとのへやがく開口をへしぱすし
わる所来るうつあれそこ出家まりわふ僧は
いはくつとえふ僧の丸すりよ。芝貴の勤めの
爾へ談よりなおそ用でや男ようてとり
えがれおらお僧芝風よまよ世るいよ
のと

▲五智之僧
大般若を將讀の施をわり。かゝるとらぶりりを
出家の身。よも大きかそへぬれぞいゑ

みも座をたちぬ。布施をゑさせのどもとわかゆへ。
法衣をまとひ。膝をくミ。人天般若波羅
蜜と高声よみ。経をひろげたれし
調子よわき大かん三巻ばかりよミしが。
あうるいきれとりそてとりそて今よかん
ぎをとくはやことへもへんきりすんだ
まかし

△千部讀誦の請状まいりけるに。一文ふ知
の猩々坊おりつりふ小知で伝説といふ

まもりひて。此度の出仕生涯の大事なりとた
がゆるぞ。それ経ありとくが。読よしろ
れるとまとめよ。もしよめずば返しをすり
とそくハ。拂子なげすてんとひつけ。りくて大
衆の座よつらなり。讀誦もすでにたゞまり。
唐紙第一とつろりし彼猩々が。まんだら書
さくといへたをしづかよいふ。遠讀かをち
がハなりしが。猩どもろよの時。例の聲
をひしとうちこまる。彼坊が唯一人。はたと

ところへ。桜の盃をつとむるにも。お湯(ゆ)
のまうと
祝(いはひ)もなく酒をといかね
▲まうしかたきれどもよいつよあわりけく。
与(よ)三郎といふ中間(ちうげん)また毎日(つごもり)の晩(ばん)ひとつ
へるさに。宵(よひ)はねようとくやとに酒久
つもやもの。もへおもひたさそ宿(きく)門(くど)と
まうけ。内よりたそやとおふ時。福の神(かみ)
のいでたところへよ。まかりいちよおをわけし。

よびいまんと。あんじるまいひみてめぐく
のち。亭主きんやうけ。鶏(にはとり)のなくと。同(おなじ)く
やうまたさそ。門をあうちおんたび
とくぎもとくぎぞくとおふやうに
こんとこふ間。奉公(ぶけ)中くあり門
をわけてあり。そこかと火(ひ)をとり水(みづ)
頭きんをまとゆきともに。亭主のさ
酒わしそでにおいかれ。中間ふん
またひつく当番(たうばん)しかそぷよひまて

へし猿の柿を打おとされやうく酒を見れ
むしろよそひ出し。御天し膳をあげさし
きをさゝ海よ。さらバ猿の神で出座ある。
おいと海申しつゝするとやさ

▲ある女房のもとに。つかうく下女を
猿といふありき大手のゆゑべ。下をよむ
うひそちハよひりしやうべゆきそやすき。
けまふとくたこさまり門をうけとひ
すまとやりぬ。夜もふけるまでしぐ嬉しよ

べどもこさうくバ。されども門をたゝく
をと聞ゆしかと云ひ。されぞといへば
猿すかしにりまりよさへらしそ。猿かれ
とらひられだ。いや与三ぞでれさるかたし
り猿でおしる。猿ハよひりしをもへかると
をのちとしそでつふやさけう

▲行暮て旅人三寄一夜のやどをかりし。
亭主も出おひ。おくうりのはいでよおいいり
客の旅のはづとちと宗客をんふく

ありさへば筆の仕合なり子をともまるゝ
ちゝろよい事にて発句をさゝとあれりし
とこ望む時
むかしこゝちめしらりとそれ石仏

▲町人のそれいなひもろあり。大晦日は数
を実庭なる棚につませ置が何とりん
くつまさうあり。亭主もわやうさ事あり
らひ下をまむひそろしめ十日めのち
よわきなる数がくつまいで。くはらくといふ

お数の子めでたくなるとことぞいふなり。
たうしても元三のうちをいはふとき扇
かれてハ下をかふ手二つれ。うちすゞがめで
ふなかりとよふぐにてしたしつまさる
つまよせてもけり。手二つれがさらふ一行ひぐ
そ何ともわきまへずてうつへる事をまひへぞと

▲人まもくれて物いふ待と衣のかたり。
鳥の衣の内へ飛へふるとみてつしとあれハ。
彼友のやで。それハ目ぐし見えちとこそ。

ゆくゑハ内へとやかへりて絹ふとんへ
ん。仍先ず虎皮(こき)しよ小袖(こそで)を一重(ひとへ)かけしかま
いつもは鈍(どん)なる傷寒(しやうかん)是(これ)を見(み)て家(いへ)の者(もの)も笑
細路(ほそのがうり)ありしよりし。気(き)ようやうにいふ
て。小袖をとらん油をと思ひのぼりけるが。彼(かの)山人(やまびと)
ある頭(わきさ)又此處(ゆくべ)あまれがあるさま落(からから)くして。
最にゑるかとくくるまが。の鈍(どん)なる男(みやこ)ふ
とかく。それしそめてさまざま最く
わしきりやけり

▲え三といふひ。膳部(ぜんぶ)とりあつかひ。月(めで)、たくひ
あとぴろくさくめでたとりね。盃(さかづき)わか
たこなりしとおもふ所なりしバ。十分(じふぶん)なる惣気(そうき)。
ひと座(ざ)を立(たち)前(あかあか)の汁(しる)に猪(のこ)まる鯛(たい)のうしら
をとりて。それよりひの太(ゆた)をよびこれこれとしれ
うしろぞぴへといふよ。又七つ八つなる
娘(ひとり)のもしまけり。母のめいのこきる。突(うそ)れね
ねをきちて。あこれハうれ知ぞくく
といひし云々(ぶけう)さ

醒睡笑巻之三目録

文字知顔
不文字
文之品々
自堕落
清僧

醒睡笑巻之三

文字知顔

▲六十ばかりの人。いろはを学問りこうがほの
学文つぷしの子をまさいちくれに珍ぢうしてするとて
先材木れるすと口よりけところむ。それ材
木ござ。材の字何とよきさやそとゝへば。ま
づ木へんはよみきさそはそうとゝへば。つり
いかでかけといふる。つけらくにそれかど
ぶんではなきにゝを。かまひてやさしさ

▲俗といはる人のかふ犬をゐて大臣とつけ
られたり。大臣くとよべばきたる故。なつたとよし
きたる子孫にやくそくしたるはいさて言
おもしろくじやうしけり白太をも
とめ大臣とよぶはいかなる心をもちやうとさ
づ称れぢつうけさ

▲武士なる人の名を、とのが苗字のこ
ゑいでんとかいゆる又月とりふ字乃急
きぶちとてゆるぢ二字をなしひ

ゑくいからさ海をれづまいきとところまで。
りひあさんとをくまれるのでいけるときさ
なりしと。庭前純代めしとくんふなつすな
ためにあかりにつまりかかり喜加乃ぢ
武士。威儀をまるとくかいけくろひ。でん
ゑつよくそれよめる名をとゑんくつ
ゆへぶちこくせとぜんなへ嗜さうか

▲脉とそい。浮中沈とも。七表八裏九道とも。
口の名をさへきたね程の医者を脉とれて

後(のち)病者(びやうじや)よとふ。胸(むね)はいつもひんわりや。中く
ありたておりやる。脈(みやく)はなにし。扨(さて)足はひゆる
するわりや。いや行てうかさうでおりやる。
脈しさうわる。頭痛(づつう)わりや。いやあしたゐ。
で行りぬ。脈はわづらとぞ。他流(さうりう)よりくも。
かくそ損ではわる。病人(びやうにん)となりて薬(くすり)を
やうくんは。ごまおじやの

不文字(ふもんじ)

▲元日(ぐわんじつ)よりかんといふ所(ところ)へ数(かず)すくねとれ迷(まい)

にまゐる。亭主(ていしゆ)膳(ぜん)を出(いだ)せといふまゝ。それまく
もてなりとて。亭主(ていしゆ)これはきざよ横着(わうちやく)の縁者(えんじや)ぞ
やあどうんずるとしやて。さぞへりやうぞ
下まは芋(いも)大根(だいこん)汁(しる)をとり中は餅(もち)上はとうぬ
らくらちそれるといふ。横着の縁者といふ
るすよとかおかりて。ちら餅の皿(さら)をみさる方へ
引膳(ひきぜん)あふり。これではとか遠慮(えんりよ)をとりぬとて
ぐちそれにもり。味よもち。たいを大根(だいこん)
とりくり。客(きやく)をまちてかけりはゞそ

とはしよけいの横着は。一旦わるくてうえ出来ぬ覗
いしせうらうとかたり

▲かのおしやうたる者ニ人ともとあひて。貴人
のもとへ行先上座の者。よくよく数をかんで。
富家の子おかわ気に痛あまりなとりては年始
し来念ではありけり。正月より三月まで
てそれに毛筋とりてくれろといひられは。
次に座しよるが。膝つき家来人へ。仙あそび様
のかうしとかをのり。なすうりとは年始へい

ゆうとハなかとるなりけり。一つしとんどとう
ぬりし。何なりぞや。さやうれ太夫ハうきれて
つかりますかといふて。その次の者きゝて。
さてを吹男れ太夫しとてハなんぞ。大工や
などのうへよしそいふことぞなりかめ。仙男
ふちう。かこしとをといふときいて。かまびす気
きそれましせこさえんしたよし

▲人皆歳末の礼とて相気しゆくぷちさ
内よ来る人ありしかをまうれ。此税義子

さんとりよをと咲(さく)ぎんかうなる志口(くち)ま稀
をしらきぐりそて。来(らいしよ)書ハおかりしめす
ましたはさう梅と申せし
▲三人行合(ゆきあひ)て一人がいふさそく明(きみよ)れなる
ハ。又一人いふおゆそいうひ。者ぢやんかりん
じやと一人がなかや書んやうね
が。世ハ福つまる町とぞいふと
▲物書(ものかき)者ども見(み)えし文をつかしへおそ所(ところ)を
とへバ。転(てん)のくとこそ行事。転(てんらく)とよそく

待連。ぱひくと云字ハ志りぬ。梅(えそ)そあうしハ一行き
ましや。音市(いち)のむひれ字をさへ志りねり
▲何かきうる志氏記まひらひ。おりべれ汁(しる)
おりべれさらとりよをとざやのしとらぐ。女房
氣(け)の上にいよりそと志うれけバふすと
とひぬりるが。くわる時主の上臈(らふ)よとりし
て。振舞(ふるまひ)よりかりうるに。主(あるじ)人座敷(ざしき)乃
始終(しじう)をとりる。饗(きやう)の上まで。帰られつると
語(かた)らうひへなまく氣どく何りしうん。

験をなされけれバ。すこしもとんぢやくしたまを
うかゞひそわるやうな

▲此か八一日物語るといふた。何をひつる
ひとつる所。はやこきうねるすう物ハ物は
の物まそ行しふぞ。さん八。かの道さんしや。
いやとよりきや。ハ。もつひかの風よつて
ぐさ。ってかへきされすとゞふ申と云
ぞ。字ハもかれしやといふ

▲ちとうかをもらひ人れいひかる八。大社

つまづく草ときいして何そふハぐ。お
をしろふとて何ゆしらハ。そを座よ
君するみさしまで。かまへて口わくうう
ようとるふて。お初くおかいるれ。ましく
草れわへとのも。すぐまハどくじやと
さいふよ。

▲永玄といふ禅つわり。人来りてそちれ
なハ。おハなる針で何しぬ。玄ハ名ろづん
かといふ。いや去ろぎんといひし。知音

する名字(みやうじ)へ笑止(せうし)其ひはし後(のち)ばんと
いづくよりきたりへばてんぐおきれ(わん)しと
くぎんをとふ時ひがしとてつる
とう(づ)

▲冬(とう)をとなを(か)つまそぞいと会れとたぐ。
こくさまそとこるへよ。そくおもし
やとさよい字しやとまそふおかつるぐ。
まいと云れ。こくさでなさるとい
ひろり

▲たれハくれねど利口(りこう)なるものよ。てんびん
とハなにとかくぞや。継母(けいぼ)といふところ
よ。それハ不和合(ふわがふ)なるといふ。されバ
こそ唐(たう)の文字(もじ)ハいふとまく
よ。まくとうくるがよひたゝせうするれバ。
くへどくりてどてこさそかの

文之不快(ぶんのふくわい)

▲根来(ねごろ)まそ。いハむろ岩室(いはむろ)梅松(うめまつ)とや字(きこ)えし
若(わか)衆よ。ござろつきし師(し)のおもひとよせ

なぐらぴひよんたらりをかけましく。
せでござする人。とくつひ。文をきつ
くさそられしまよ。文章のうへ。これこの
まんとなり。どうもうくもと筆をとらめ
うくびいされど。それハそうすことはかま
たまふ。急ひなり。ちらつるひと

▲わさる人右筆とよびそ。此類ハ久右衛
門同前是作とりけど。それハかな書ど
筆をおねるはぞれすらバよくきこゆ

ほやりは。此類ハれかはつてられ本字にかなは

▲くせ作のなより。組合の方へ文わり。ひ
きらきハ。筆ぞそまは日乃字わりてそれ
下よ四又対ハ浦りうんとせうか。何とも
合点ゆかねとぞ。文とるかね。後乃見氣
若く此御乃文氏内。なまやされありつる
ぞ。務よらとえらぜしてかねるかよし
くつまなれバ。かあるハ。作者入きそ
わるが。七日のねくとり本字さへ見うま

わくねり

▲とかく当世ハ文章のきしがきらんなる
とりみだしてかゝる人がらよう。
細書れ侭へぱきしうるとあん
送をする十八本松茸箆捧て
平井保昌入道
けいせいや
玉倚名

▲文盲なる人ハゆげをとりにやるとて。
紙をひろげぱ手紙に書くよぱ墨でつけ。それ
とゞしうでくびのくるまぱかりきとぢ
とまりし云て是をかりしわたとりふ
ておとをつかりしう。ことはまうかつきぱゆ
げりをり世とりみしとれ取りせんとりふ
ましぱ晩と椀のわかりと書てをどしりう。
くりにかりうる仁合点しうつねと云
るすれ笑ぱはをよげね
自傳藩

▲板ハへしとさんとぱ座敷かさ二三人屁あし。

もぞに板をはりけるが。ぬし師天井
をのぞけば。ぞりえちにありしかど。かの庵
をれ見ゆる。か坊主をわらりけるに。是か
何なりともとりまへとして。坊主さ
いて。それハ円あの名ありるをそこうく。
性よかりしぐまさらけねもしやよ
▲ひそかにつかれ彼の小名ぐしくやま
かよふりかりぜんかるをかくて坊主かづ
くら笑在に行いくにを衣文恵づまり
ふるに門ちをふてくらをもせりうちらう
誰人そとぽ髪にとくめられハ。在家か
ら笑へにまつる。戸をとわけよと
▲わるひとり坊主ぽ盗賊をしかへり
きくぽ出家ける衣へ。不平人あれり。口
とめぐりん料簡をかりつるに。そする
乃口ハ何とそくちひぞや。手をつけられ
さくとそよぽやわまりさむさにぞこ
一もえさしを一口らる

△昔より座せきにハ禁酒なり。寺中ろ
酒をこのむ僧乃かくしてそ般若とさうせ。
角をとりいかたを弦張にあハせ上り
又鉢れ大黒鉢に釘付されをとりあひふ
名り。酒をとりて毛頭へ入てき呑へ
えび茶又鉢の大黒鉢なり。京まいりくん
るすを禄にも昌鉢おり。それ敵まはれく
面ちそ帥のよふと巻にあまり京へよひ
乃志げられぞべ行まれく推しつん
きり行る時うちの乃れ鉢弟子をもちへ
途中まで酒に包ひとさうし。はくしさ
やる其家し。ろと口をあけ〈あわりね。
そろくるりく家まぞれハうんぞ。常に
わらく鉢をそんといふ。さしいちとい
うくんとそ手をとりかりて見んまこ
とた山鉢つへん内まこふ〈といふ数
がする
△天ま月ふりと思ひ。わるとふきまれをく

ひかるゆゑ。ぜんかまりえ付てきば。
をうし
めされよといふ僧にやわりけん。とき
劫乃入堂なるかれ。ことに歴劫不思儀乃
滋味あり。ちえて化のけひゝには七十二候
とそ。时乃うつるに変じ。それくなり
ゆく。寄特をやさん。田鼠化して鴽となり
て。雀海中に入て蛤となり。鳩友じて
鷹となるといふすわるか。愚僧かさいは
そりくふる。かへされ友じてゐるとおまへ

と眼あよなりける。は寺ねらハ讒せよ

▲清僧

人跡絶たる山中に。一宇の堂あり。竜
やられて人寿不乃の香をたく院主あれ
ど。世すて人の昼されも立よう人さ
よしをきくに。いかなる不情者余の行
者すわん。は仏閣にいれとも懐しすれ
ものりし。悪性乃さかり髭ひとすじ
ならねど。おそろしき所に。なんとして

むかし八丈海邊ん。此女房れわるゝとのよ
と。嵐はげしき冬の夜。芝宇治にとまりけり。
彼俳諧の流よぞ有るとかれんじ也。
この定家よりわたしうすれ。いとゞし
乃人やといひたり。絲もなき夫婦り
しそと人のまうし挿入てられ。何も亦。
傍主の花をち向しもれ候。何ぞとそよ
り。光らん家の伽なりとしりて。三体
狂入。犬とく見とそいでしる

▲百三年余人のまりれ汲らくとよ。筑前のん
らた宰府の天神乃飛梅。天火よやけ
て。ご入ひ花さられ。ごそそと漢まし
こさるりとん。菅原とあし。知もとえて
ぬとさつまても。世にひくれ短冊とはけ
来もる中ま梓役傍とそ。勇猛精をな
阿吉傍乃。よめる亦しそ拝勝まま
てとさへの見し梅乃根よれらん
おりをかし花の動きぬ

短冊を木の枝に結びて見ずやひられけるを
くじとおもひち縁の名わりさハつゝ。花実甚
ま思ひもよへく感は深きて。入門
と。袖とも仏ともあと合せし
山乃端りさうづかひんまれども
幸世の定めり秋乃夜の月
解脱上人の世よ生へハ望わるにあるう。
俗よそひけハ。狂人れとし。何かうれ
世の中や。一方ハづまのところよりかくさん

とりまし。とのえ歌あり引合せて。衣の
袖を志ぼりあへさ

く…の社にて…ひられけると
人よからぬ編のおかうきにて礼…
まぢへもしりよべく家は陰をされば
と神とも仏ともしあと命をうし
あり編りさりてぐいとんまれもくう
覚世れ鬼なり…の秋の月
解脱上人の世まかへい…るにみ
…
…

国立公文書館
National Archives of Japan